



特集
土木遺産Ⅱ
時を超える技術者のこころ 岡山県

Special Features
Engineering's Heritage Ⅱ
Engineer's Feeling Surpassing the Time Okayama Prefecture



笹岡久人

SASAOKA Hisato
三井共同建設コンサルタント株式会社
品質環境管理本部/品質環境管理部/副技師長

勝山の船着き場

町並みと共存する巻石護岸

古来、人びとは水辺に住んできた。日本における「土木技術」は、水を治め、水を利用し、水を渡るという目的をもって発達してきた。水は、飲料、農耕や森林業、漁業、交通など、人間の営みの根源となっている反面、同時に生活を脅かす自然の力という面も有している。

その水を利用するために、用水路や川港、橋、堰堤や

ダムなどがつくられてきた。それらの構築物の中には土木遺産として名声を得ているものも多い。さらに、日本各地の水辺や水際には、ひそやかにあるが堅牢で美しい「水辺の土木」も多く残されている。勝山の船着き場は、古



い町並みと共存した身近な「水辺の土木」の一つである。

勝山町は岡山県の北部に位置し、中国山地を流れる旭川に沿う歴史と伝統に彩られた町で、昔から作州西部の政治・経済・文化の中心をなし、出雲街道など交通の要衝として賑わってきたところである。今も河畔には白壁づくりの家並みが続き、かつては重要な交通手段であった「高瀬舟の発着場跡」も残されている。

1—巻石構造の護岸

勝山は美作東部の城下町であり、岡山から旭川を遡る高瀬舟の最上流部の川港であった。

勝山藩主三浦明次は高瀬舟の舟運に特に力を入れ、物資の集散地として勝山の繁栄を支えた。城下町は、高台に寺町と武家地が配置され、旭川沿いの出雲街道に面して現在まで続く町人の町が形成された。

旭川に沿ってのびる巻石護岸が高瀬舟の発着場跡として往時を偲ばせている。巻石護岸は県下唯一のもの



であり、「ガンギ」と呼ばれる石段とともに、700mに渡って完全に残されている。巻石構造とは、柱や構造物の土際の部分を石で巻きめぐらし、腐れ留めをしたものをいう。旭川では古い町並みと相まって、独特の景観を形づくっている。

2—旭川の舟運

旭川の舟運は室町時代末期に開かれ、中世から近世にかけて物資輸送の重要な交通路であった。勝山はその最上流の船着き場で、岡山までの16里(約64km)を下りは1日、上りは5～6日を要した。下りの積み荷は、年貢米が主で、上りは塩・干物・砂糖などの生活必需品が積み込まれた。積み荷は下るときは千八百貫(6.8トン)まで、帰り荷は二百貫(0.8トン)程度であった。舟は長さ八間(14.5m)、幅八尺(2.4m)。大社参りや金比羅参詣の人びとの行き帰りにも利用され、旭川と高瀬舟は、まさに瀬戸内と内陸を結ぶ交通の大動脈であったが、大正14年の鉄道開通にともない衰退し、昭和9年の水害で完全に消滅した。

3—町並みとの共存

昭和60年、白壁の土蔵、連子格子と石壁の商家のある町並み、高瀬舟の発着場跡が、岡山県で初めて「町並み保存地区」に指定された。町並みの屋根は黒色の釉



薬瓦を主体に2～3割の石州瓦が混在している。町屋の一般的な形式は、二階の窓を虫籠窓か格子付き窓にして、一階には格子を建てている。

高瀬舟の発着場跡や巻石護岸は、勝山の景観を特徴づける大きな要因となっている。現在は、護岸や石段を活用して、夏季には「魚のつかみ

取り」、「灯籠流し」などのイベントが行われ、また河川愛護活動の一環として「一斉清掃」も行われている。これらの活動は、地域コミュニティの醸成に寄与している。

4—人と川の絆

人びとの移動や荷物の輸送に大いに利用された高瀬舟がなくなった今、高瀬舟の発着場跡や巻石護岸は舟運という役割を終えた。しかしながら、巻石護岸はこれからは河岸を守る、水辺に近づく、水に触れるという役割を今後も果たし続けるであろう。

〈参考文献〉

- 1) 「日本の町並みⅡ」西村幸夫監修、三沢博昭撮影、平凡社
- 2) <http://www.town.katsuyama.okayama.jp>
- 3) <http://www.new-maniwa.mls.ad.jp/index.asp>

- 写真1[前頁上]—高瀬舟の発着場跡
- 写真2[前頁左下]—高瀬舟の模型
- 写真3[左上]—古い町並みと共存した石畳や石段
- 写真4[右上]—巻石護岸の石畳
- 写真5[左下]—水辺に下りる石段「ガンギ」
- 写真6[右下]—虫籠窓や格子窓のある商家

(写真：筆者)